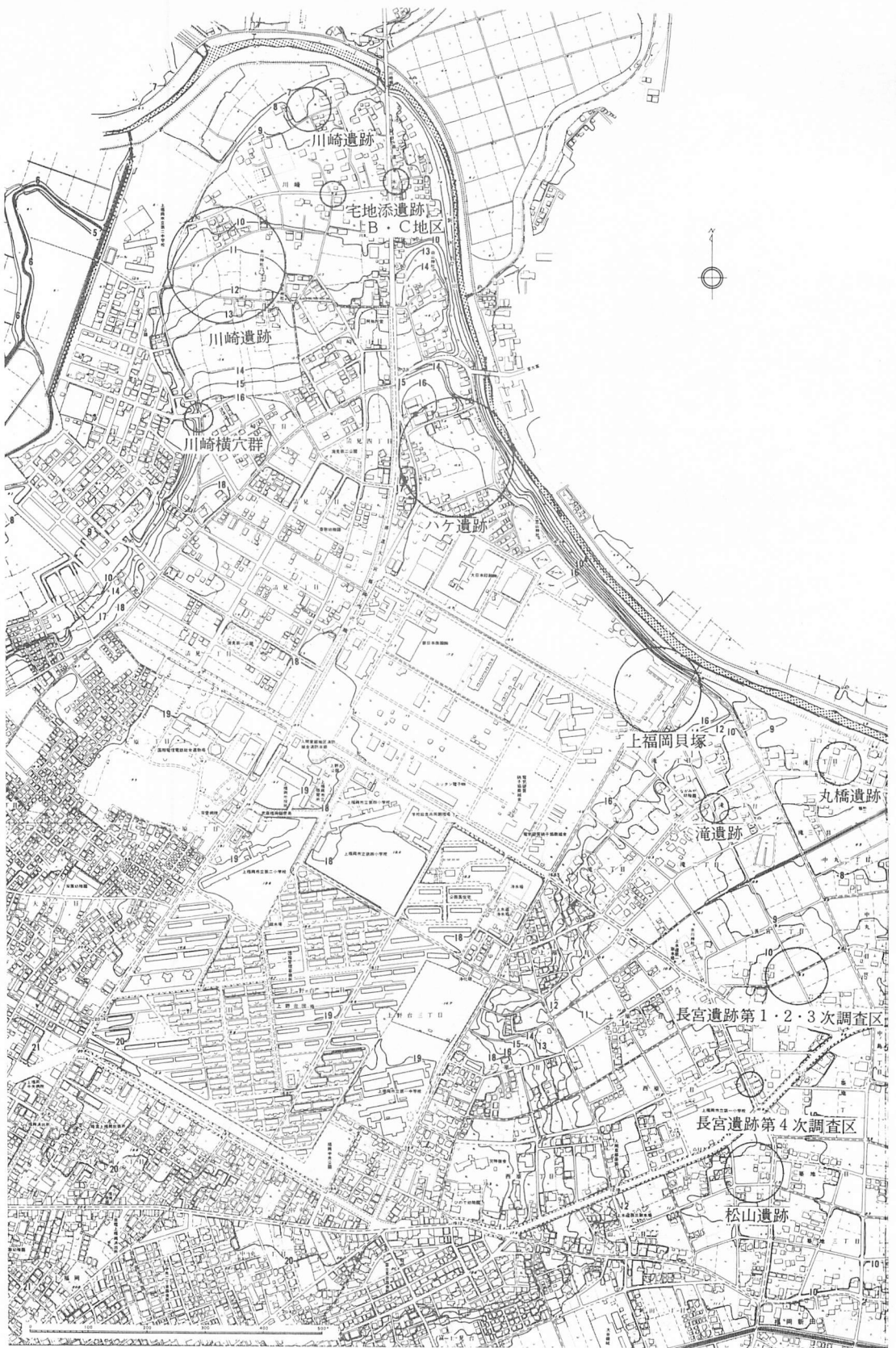




- 1 川崎遺跡 2 川崎貝塚 3 上福岡貝塚 4 川崎横穴群 5 ハケ遺跡 6 長宮遺跡
 7 城山城跡 8 丸橋遺跡 9 松山遺跡 10 羽沢遺跡 11 黒貝戸遺跡 12 打越遺跡
 13 水子大応寺前貝塚 14 大井戸跡遺跡 15 東台遺跡

第1図 遺跡位置図(1)



第2図 遺跡位置図(2)

I 発掘調査に至る経過

上福岡市には、約35ヶ所にも及び多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されている。一方、当市は、東京30分圏内という位置的条件から、東京のベッドタウンとしての様相を呈し、人口流入が激しく、宅地開発が盛んに行なわれている。市教育委員会では、昭和49年度より規模の大小問わずの開発に伴う、埋蔵文化財の破壊に対処するため事前に記録保存のための発掘調査を実施している。

本調査報告書は、昭和53年度に実施された小規模開発で埋蔵文化財包蔵地に該当し、遺跡に影響を及ぼすと認められる開発行為に先立って行なわれた10ヶ所の発掘調査報告書である。遺跡名、遺跡所在地、原因者名、調査面積、調査期間は、下表のとおりである。

	遺 跡 名	所 在 地	原 因 者	面 積	調 査 期 間
1	長宮遺跡第2次	上福岡市長宮2-1-27	近藤昭雄氏	235m ²	4月25日～5月15日
2	宅地添遺跡B地区	〃 川崎198	木村利夫氏	170m ²	5月15日～5月25日
3	宅地添遺跡C地区	〃 川崎230	沢田茂氏	130m ²	5月23日～5月31日
4	長宮遺跡第3次	〃 長宮2-5-11	堀井孝次氏	111m ²	7月24日～7月30日
5	丸橋遺跡第2次	〃 滝 3-3-13	内田郁男氏	210m ²	7月26日～8月6日
6	ハケ遺跡B地区第1地点	〃 中福岡1228-40	風間治男氏	165m ²	8月28日～9月10日
7	ハケ遺跡B地区第2地点	〃 〃 1181-2	吉野静氏	360m ²	9月11日～9月25日
8	滝 遺跡	〃 滝 2-6-11	西田アヤ氏	129m ²	10月2日～10月13日
9	長宮遺跡第4次	〃 長宮1-1-14	矢島重男氏	37m ²	10月6日～10月9日
10	松山遺跡	〃 松山2-5-4	宮寺三代松氏	479m ²	10月14日～11月6日

この調査に至る経過は、庁内の関係課との連絡調整、農業委員会事務局から農地転用許可申請段階、また建設部都市建設課から開発事前協議、建築確認等の申請段階でそれぞれチェックされ、教育委員会に通知され、教育委員会は、再度、遺跡地図と照合のうえ、現地調査を実施し、遺跡の状況を確認したうえ、遺跡に影響を及ぼすとみなされる工事主体者（原因者）に連絡し、協議を行ない、その結果、教育委員会が記録保存のための発掘調査を工事主体者（原因者）から依頼され、教育委員会が発掘調査主体者となって調査を実施することになったのである。

このうち、個人による個人住宅6件（新築5件、増築1件）、貸家建設2件、倉庫建設2件であった。

（高本文夫）

II 上福岡市の遺跡の立地と環境

埼玉県上福岡市は、荒川右岸の武蔵野台地縁辺部と荒川底地の水田面に位置している。台地縁辺には、荒川の支流である新河岸川が流れている。

荒川右岸の武蔵野台地縁辺部には、白子川、柳瀬川、黒目川等の河川が開析していて多数の遺跡が知られ、打越貝塚や上福岡貝塚等の考古学上著名な遺跡が多い。

市内の遺跡は、川崎舌状台地（A面武蔵野段丘面）とそれよりも一段低い段丘面（B面立川段丘面）と水田面から成り立っている。戦前の調査では、川崎貝塚、上福岡貝塚が知られていたが、近年の開発に伴う調査等によって多数の遺跡が知られるようになった。A面には、川崎貝塚、川崎遺跡（松尾他 1975、1976、笹森他1978）川崎横穴群（小泉他 1972）、ハケ遺跡、宅地添遺跡などが調査され、縄文時代早期末～前期前半、中期後半、古



第4図 遺跡地形図(2)

IX 松山遺跡の調査

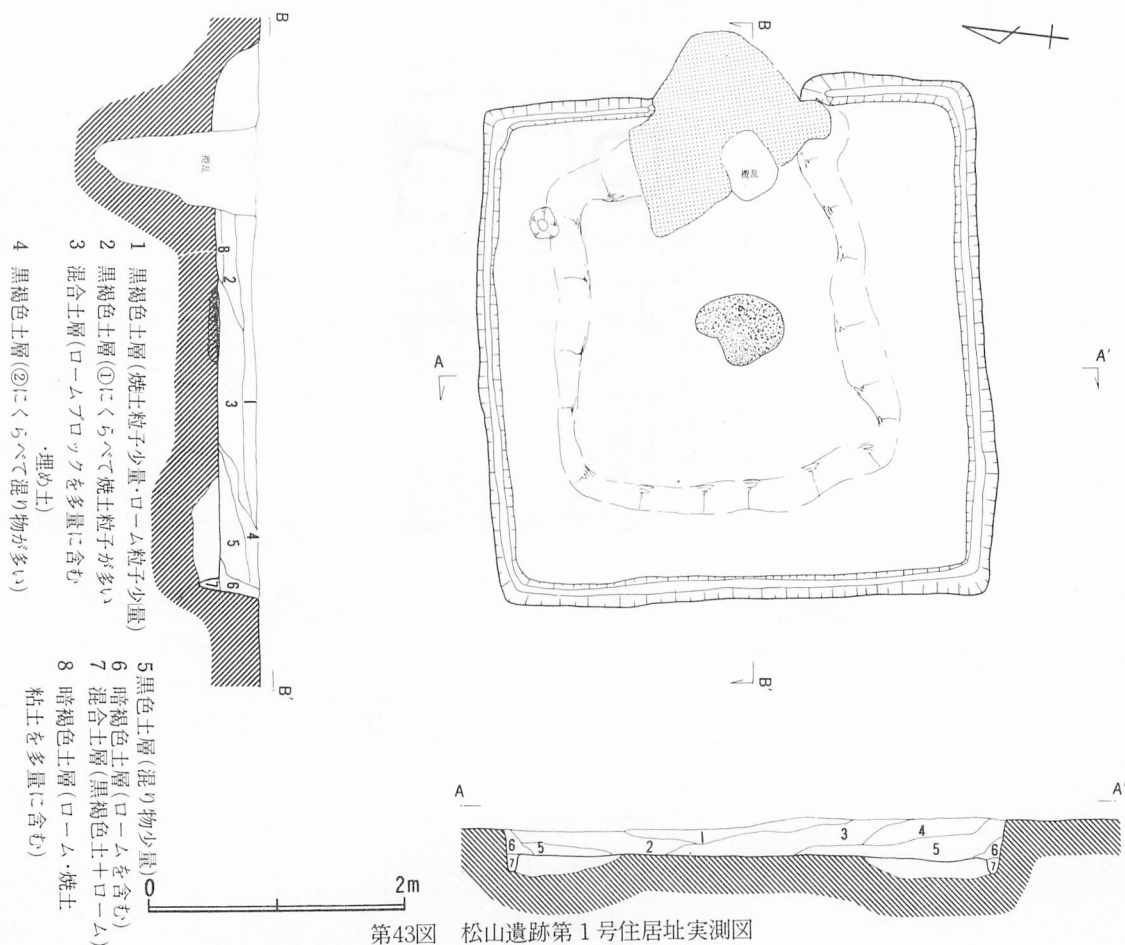
1. 遺跡の立地と調査の経過

松山遺跡は、前記した長宮遺跡第4次調査区の150 m南に位置する。時間的に一世紀強の幅があり、別の遺跡の可能性もあるが連続することも考えられる。以後の調査によって決定されていかねばならない点である。

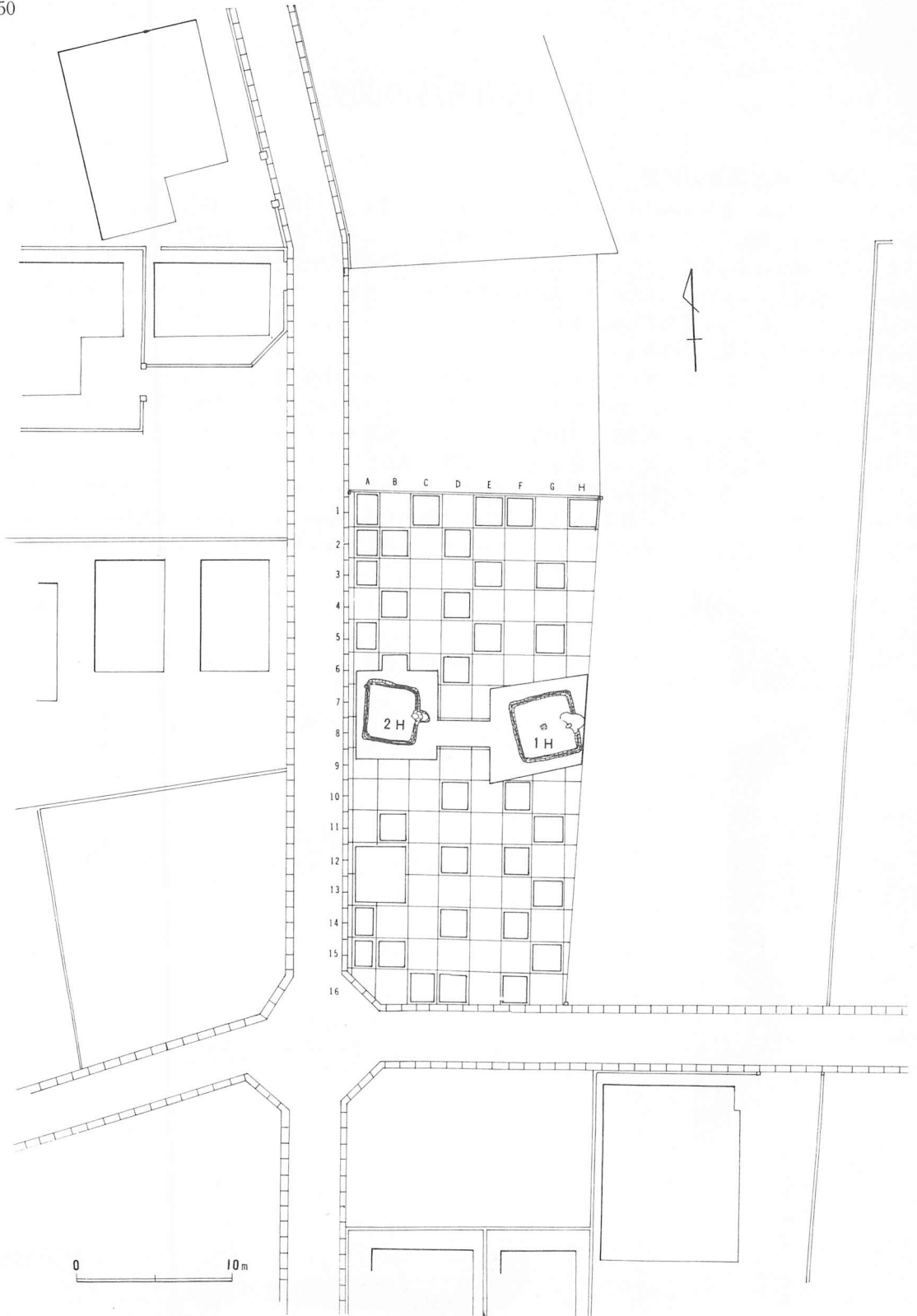
さて、松山遺跡は長宮遺跡の立地の項でも記したが、北側に武蔵野段丘面と考えられる川崎舌状台地が比高8 m位高く、崖面を呈している。また、東へ500 m程でゆるやかに低地の水田面に移行し、南へ約200 mで小河川の江川が流れている。江川は西から東へ流れ、新河岸川に流れている。松山遺跡は、この川によって形成された扇状地形を呈する台地上に位置している。

調査は、南北に走る道路際の境界杭を基準にして、東西方向にA～H区、南北方向に1～16区として、2 m間隔にグリッドを設定した。調査区内は畑地で、牛蒡を作付けしていたため、牛蒡痕の攪乱が非常に激しい。ソフトロームはほとんど存在せず、現耕作土(60～70 cm)の下が、直接ハードローム面となる。

当初、A列とG列を第1区、第3区、第5区……と調査を進めていった。その結果、2日目にG-7区に第1号住居址、A-7区に第2号住居址を確認した。予定のグリッドを図示したように、B～F列を調査した後、遺構の有無の確認を待って住居址の周囲を拡張し、プランを検出した。なお、A-13区から須恵器坏破片が数片出土したので、周囲を拡張したが遺構は存在していなかった。また、調査した各グリッドからは、遺物はほとんど



第43図 松山遺跡第1号住居址実測図



第42図 松山遺跡全測図

出土していない。

2. 検出された遺構と遺物

○第1号住居址（第43図、第44図）

東西径3.8m、南北径3.9m（中央部、周溝中央間の長さ）。プランは正方形として良いであろう。周溝は竈部分にローンを袖用に残しているため、竈部分を除いて全周している。周溝幅は10cm程で、深さ10～15cmの範囲にある。壁面は非常に良好で、ほぼ垂直に立ち上がる。

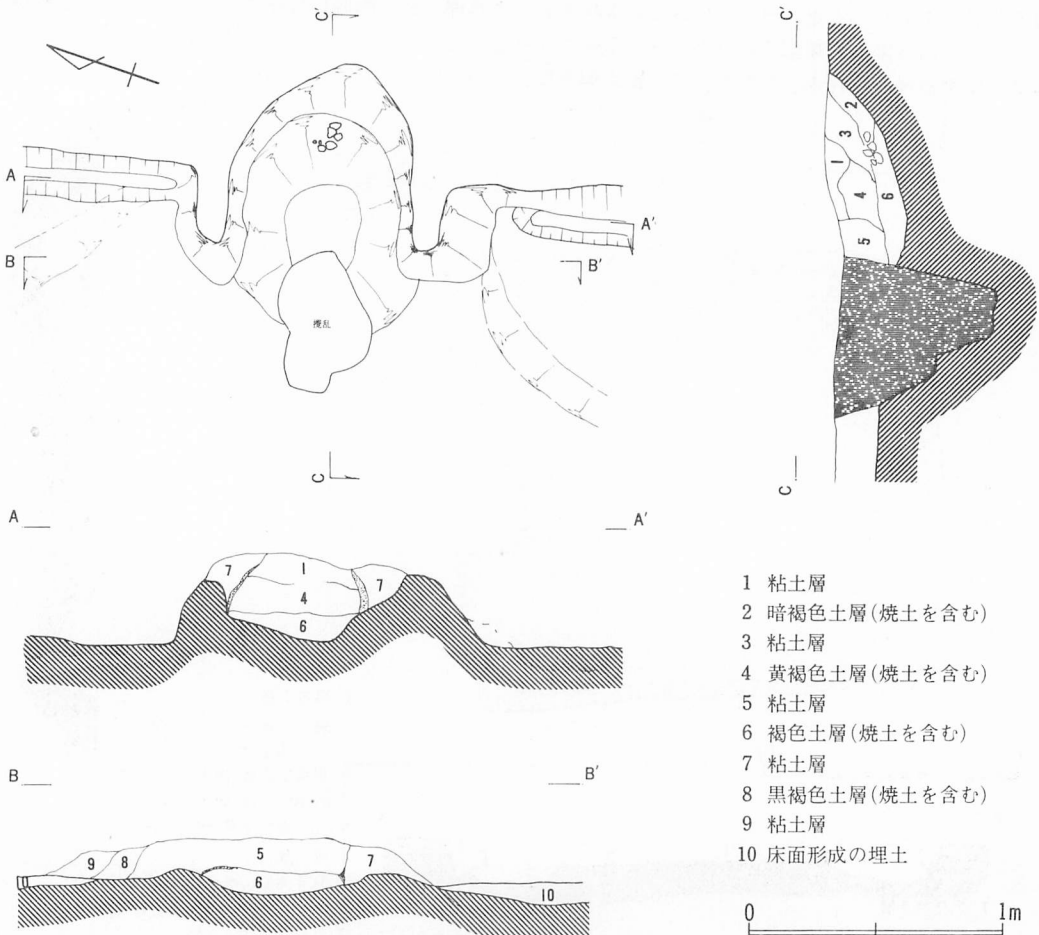
竈は、住居構築当初からローンを壁から残し、突き出させて、その上に粘土で構築しているものである。竈を構築していた粘土は大きく流出している。土層断面を観察したところ、住居壁を結ぶ線より外方に焼土ブロックが集中している部分があった。おそらく支柱等のものがこの上に置かれていたものと推察される。

竈中央に、上層から攪乱のピットが穿たれている。

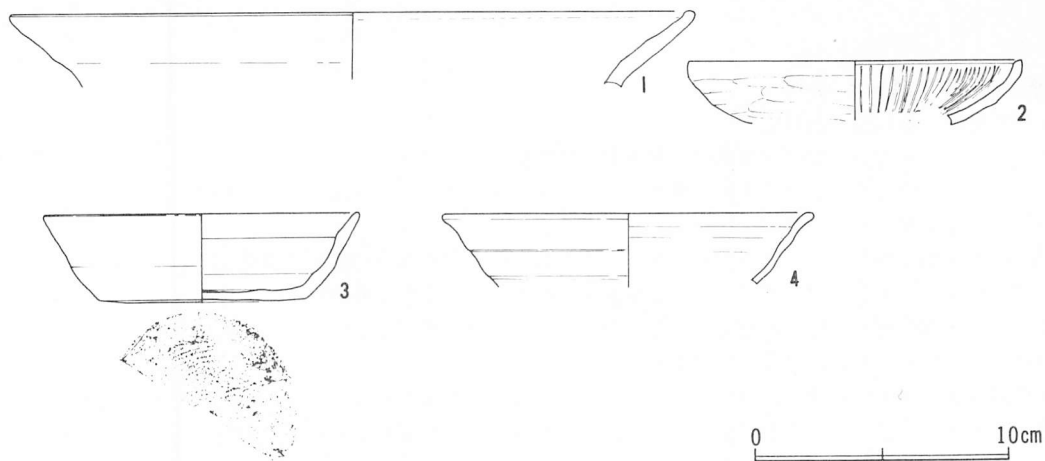
住居址床面は、中央のみ非常に良好に踏み堅められ、周囲は軟弱である。中央部分に炉址が検出された。これは床面を直接炉としていたもので、掘り込みは認められず、平坦な面をしている。床面から深さ10cm程、ローンが過熱を受けていた。

なお、出土遺物の記録等が終了した後、床面下を調査した。床面は周囲が構築当初の荒掘りの面で、凸凹が激しく、深さ15cm程現床面より掘られていた。

出土遺物は非常に少ない。床面上にはなく、いずれも覆土中から細片として出土している。



第44図 松山遺跡竈実測図



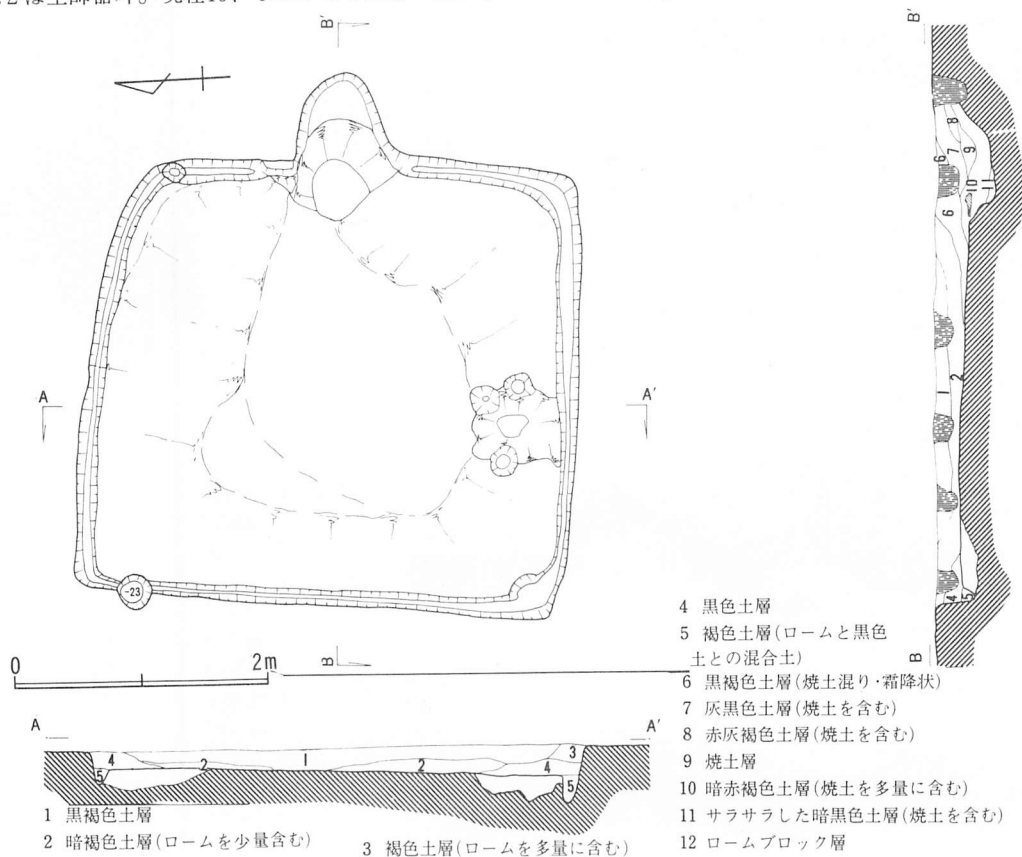
第45図 松山遺跡第1号住居址出土遺物実測図

○第1号住居址出土遺物（第45図）

出土遺物は非常に少ない。床面上にはなく、いずれも覆土中から細片となって出土した。総数10数片である。

No.1は土師器甕口縁部、現存 $\frac{3}{4}$ 。口径27cm（推定）。色調明褐色。口縁部は「く」の字状に折れ、直下から肩が張る器形になるものと思われる。口唇部は丸味をもって処理され、内側には指などによるへこみが看取されて、したがって、口唇部は先端部では立ち上がり気味になっている。

No.2は土師器坏。現在 $\frac{1}{10}$ 、したがって土器の傾き等について図示したものと若干異なっているかもしれない。



第46図 松山遺跡第2号住居址実測図

口径13.2cm(推定)。色調黄褐色。胎土に石英等の2～4mm程の小砂利が混入している。口唇部は平坦気味に作られ、内側に向かって斜位になっている。外面は、口唇部は横なでの後体部下を横位にヘラケズリを施している。底面はおそらく丸味をもつものであろう。内面には縦に暗文風のヘラ磨きが施されている。

No.3は須恵器坏。口径12.7cm、器高3.5cm。底部切り離しは糸切り後、外縁部回転ヘラ削り。ヘラ削り幅は1.2cmである。色調青白色。口唇部は暗色になり、底部方向に火燐が観察される。内面底部は螺旋状に轆轤整形痕があり、体部に移行するにしたがって、ゆるい凸凹となる。外面は底部近くに一段の凸がある。胎土には4mm程の石英等の小砂利が混入している。

No.4は須恵器坏。口縁部現存 $\frac{1}{4}$ 。口径14.6cm(推定)。色調暗褐色。口唇部はゆるく外湾気味につまみ開かれています。

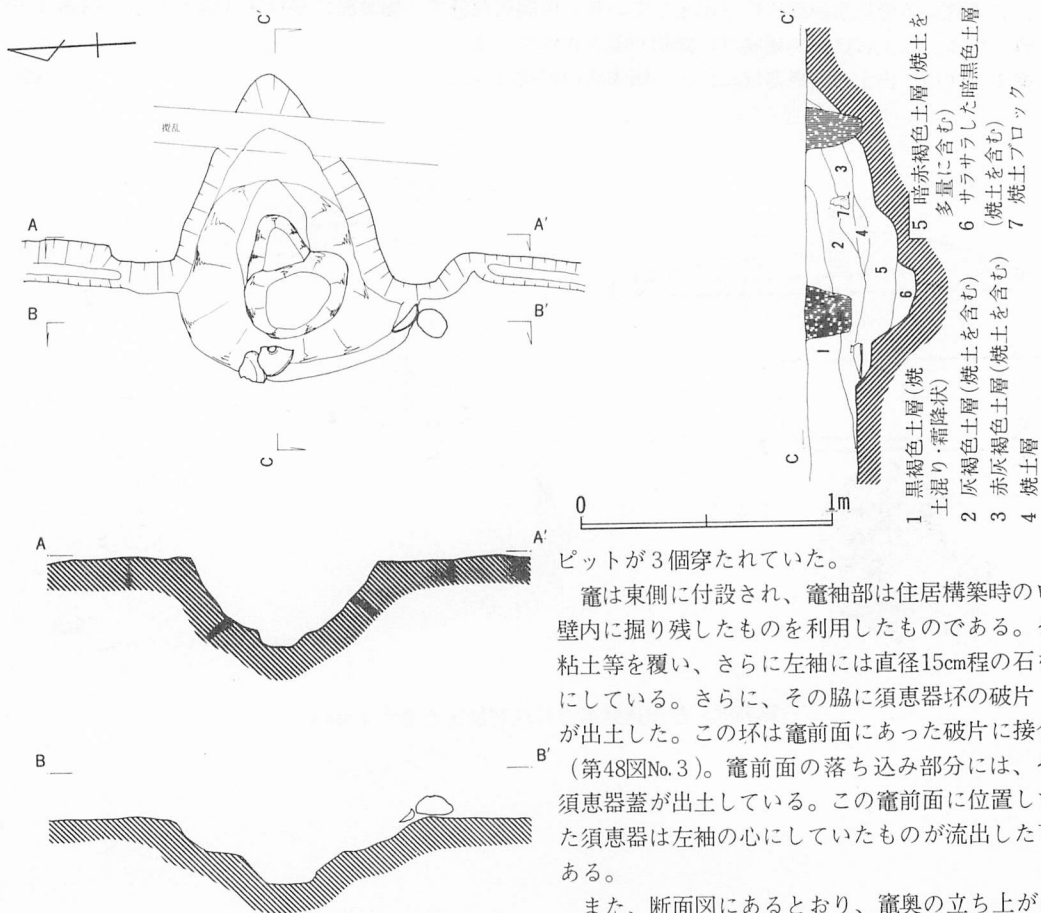
以上の遺物は、須恵器坏や土師器甕などは国分期でも前半に位置付けられる。

○第2号住居址(第46、47図)

プランは台形状を呈する。竈が付設する辺が最も短い。壁直下のコーナー部分から計測すると3mである。その対面は3.6m、南側辺3.21m、北側辺3.2mという数値を得た。壁は良好にほぼ垂直に立ち上る。

周溝は全周する。南西隅の周溝部分は円形のピット状になっていた。北西隅近くに壁外の方に径25cmのピットがある。深さは床面から-25cm、周溝底から-10cmを計る。さらに北東隅周溝内に深さ-15cm、径15cmのピットがある。これらの3つのピットないしピット状のものを結ぶと、ほぼ直角に近くなる。

床面は、中央部分は良く踏み堅められ、周辺は軟弱である。南側部分は、覆土が黒色土で周辺の床面と異っていたので、調査してみたところ、凸凹の激しい不整形形のピット状になった。さらに、そのピットの周囲にも小



ピットが3個穿たれていた。

竈は東側に付設され、竈袖部は住居構築時のロームを壁内に掘り残したものを利用したものである。その上に粘土等を覆い、さらに左袖には直径15cm程の石を袖の心にしていて、さらに、その脇に須恵器坏の破片($\frac{1}{4}$ 程)が出土した。この坏は竈前面にあった破片に接合した(第48図No.3)。竈前面の落ち込み部分には、その他に須恵器蓋が出土している。この竈前面に位置して出土した須恵器は左袖の心になっていたものが流出した可能性がある。

また、断面図にあるとおり、竈奥の立ち上がり部分に焼土ブロックが集中しており、おそらく支柱等のものが

第47図 松山遺跡第2号住居址カマド実測図

設置されていた可能性がある。

○第2号住居址出土遺物（第48図No.1～5）

No.1、No.3は竈袖、竈前面から出土したものである。他はいずれも住居址覆土中に散在していたものである。図示したもの他には、須恵器甕、土師器甕の破片がある。小破片で図示出来ない。床面上からは遺物は出土していない。

No.1は須恵器坏蓋。略完形。口径15.5cm。色調灰白色。重ね焼きをしたらしく、口唇部位幅2cm程にわたって、色調が暗灰色に変化している。外面は丁寧に整形されている。内面は轆轤整形痕が螺旋状に周っている。外面は丁寧に整形されている。胎土中には径5mm程の小砂利、さらに長さ3～5mm程の白い繊維状の鉾物が混入している。

No.2は須恵器坏蓋。全体の $\frac{3}{4}$ 程の現存である。つまみ部分の形状に外側に大きく広がる特徴を有する。色調青灰色。胎土に長さ3～5mmの白い繊維状の鉾物が混入している。

No.3は須恵器坏。現存は $\frac{3}{4}$ 。口径12.3cm。色調灰白色。内外面は丁寧に轆轤整形され、凸凹が少ない。底部の切り離した糸切り後、周辺部回転ヘラ削り調整を施している。ヘラ削り幅は2.5cmである。胎土には長さ3～5mmの白い繊維状の鉾物が混入している。

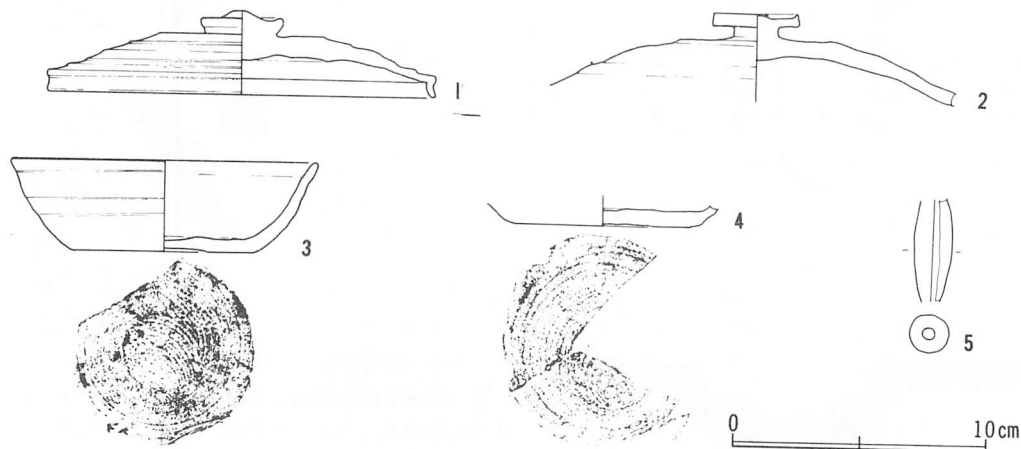
No.4は須恵器坏底部。底径7.5cm。色調灰青色。底部は糸切り離しの後、底部周縁部回転ヘラ削り調整を施している。削り幅は2.5cm程である。胎土に白い繊維状の鉾物が混入しているが、量的には多くないようである。

No.5は円筒状土製品。図にした上部、下部ともに欠損し、しかも半欠品である。胎土には鉾物の混入が少ない。中央部最大直径1.5cm。中央穿孔直径6mm。

なお、この他に須恵器甕胴部破片が出土している。色調灰白色で、器表面に平行叩き痕がある。内面は平滑に整形されている。胎土には白い繊維状の鉾物が混入されている。

尚、第1号住居址出土の須恵器坏には白い繊維状の鉾物は混入されていない。

（笹森健一）



第48図 松山遺跡第2号住居址出土遺物実測図

PL11

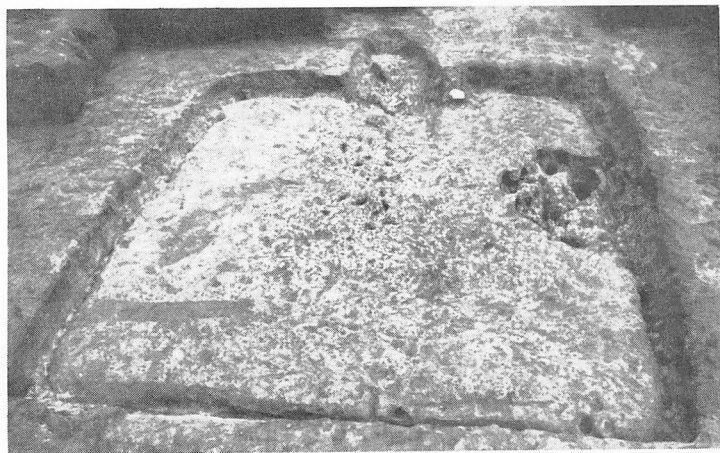
松山遺跡



第1号住居址

西より

南より



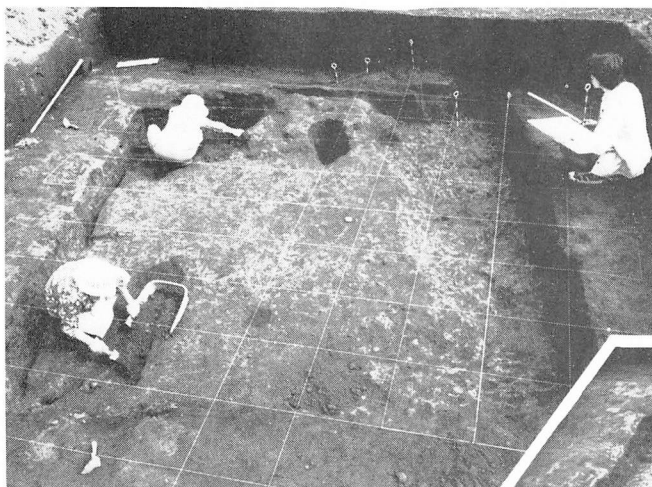
西より

北より



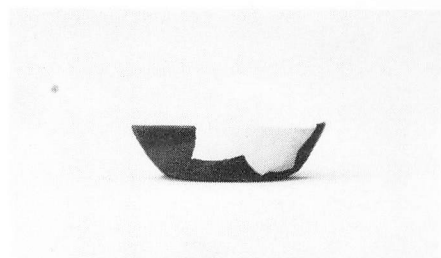
第2号住居址

PL 12



第1号住居址調査風景

同床面下

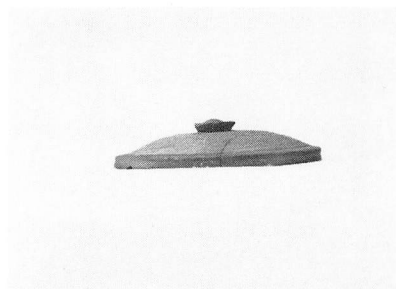


土器No 3



第2号住居址床面下

No 1

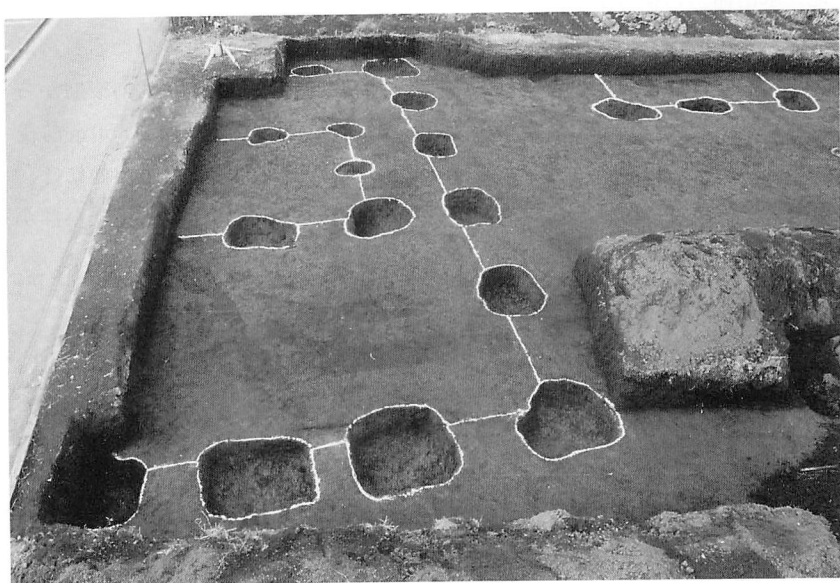


カマド断面

No 3



○松山遺跡第1次1号住居跡（第8－3図参照）



○松山遺跡第22次1～3号掘立柱建物跡（第8－1図参照）

Ⅱ 考 古

安時代に属する住居跡11軒、掘立柱建物跡3棟、井戸跡1基、土坑数基、中世の井戸跡3基、中近世以降の溝・井戸跡などになる。また、遺跡の広がりを平安時代に関してみると、目下のところ、松山2丁目から築地2～3丁目にまたがる東西約240m、南北約210mの範囲と推定される。

3 松山遺跡の遺構と遺物

(1) 飛鳥・奈良・平安時代の集落

松山遺跡第1次1号住居跡(第8-3図)

南北3m90、東西3m80のほぼ正方形の住居。周溝はカマドの袖部分を除いて全周する。住居床面は中央のみ良好に踏み固められている。中央部に炉跡が見られる(文献37)。

覆土中より土師器甕口縁部(1)、暗文が施された土師器^{つぎ}坏(2)、須恵器^{すえき}坏(3・4)が出土している。これらの所属時期は8世紀第4四半期であると考えられる。

松山遺跡第1次2号住居跡(第8-3図)

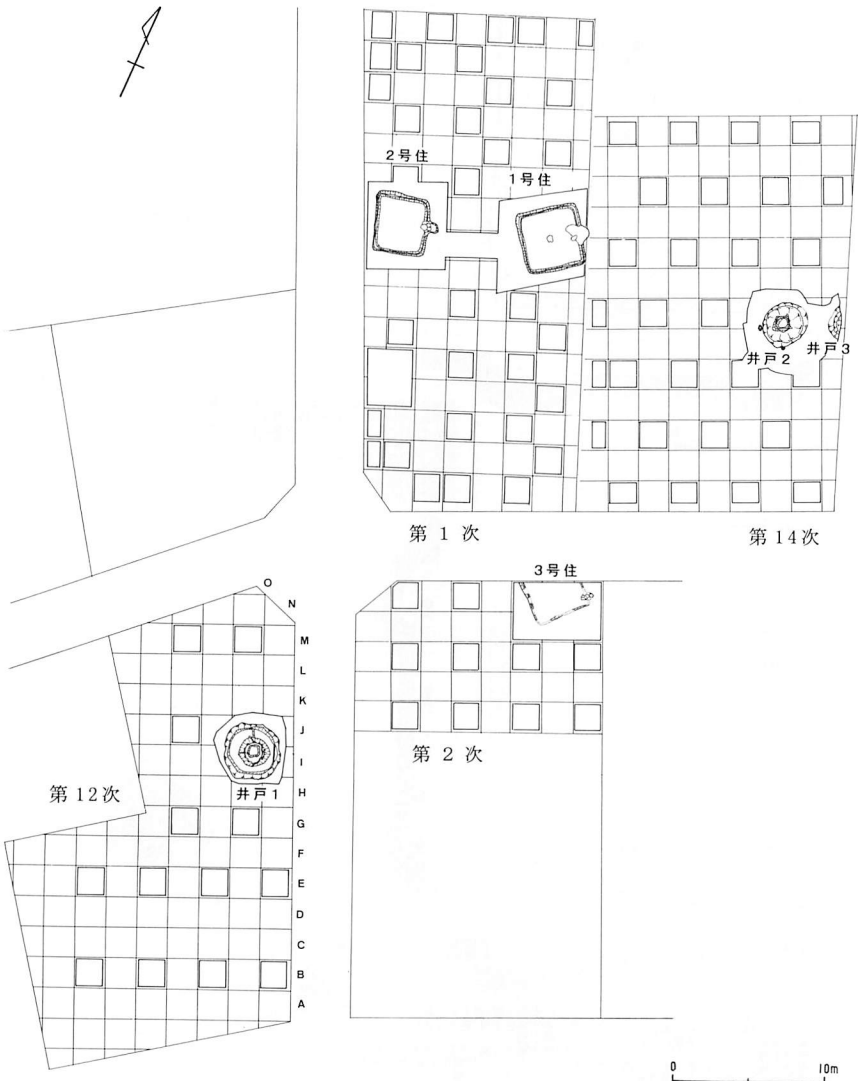
東側辺3m、西側辺3m60、南側辺3m21、北側辺3m20の台形状である。周溝はカマド部分を除き全周する。床面は中央部は良く踏み固められている。南側には不整円形のピットが確認されている(文献37)。

カマド袖、カマド前面より須恵器蓋(1)、須恵器坏(3)、覆土中からも須恵器蓋・坏(2・4)が出土している。これらはいずれも白色針状物質^{しんじょう}を含むものである。また、土錘(5)が出土している。所属時期は8世紀第4四半期になるであろう。

松山遺跡第2次3号住居跡(第8-4図)

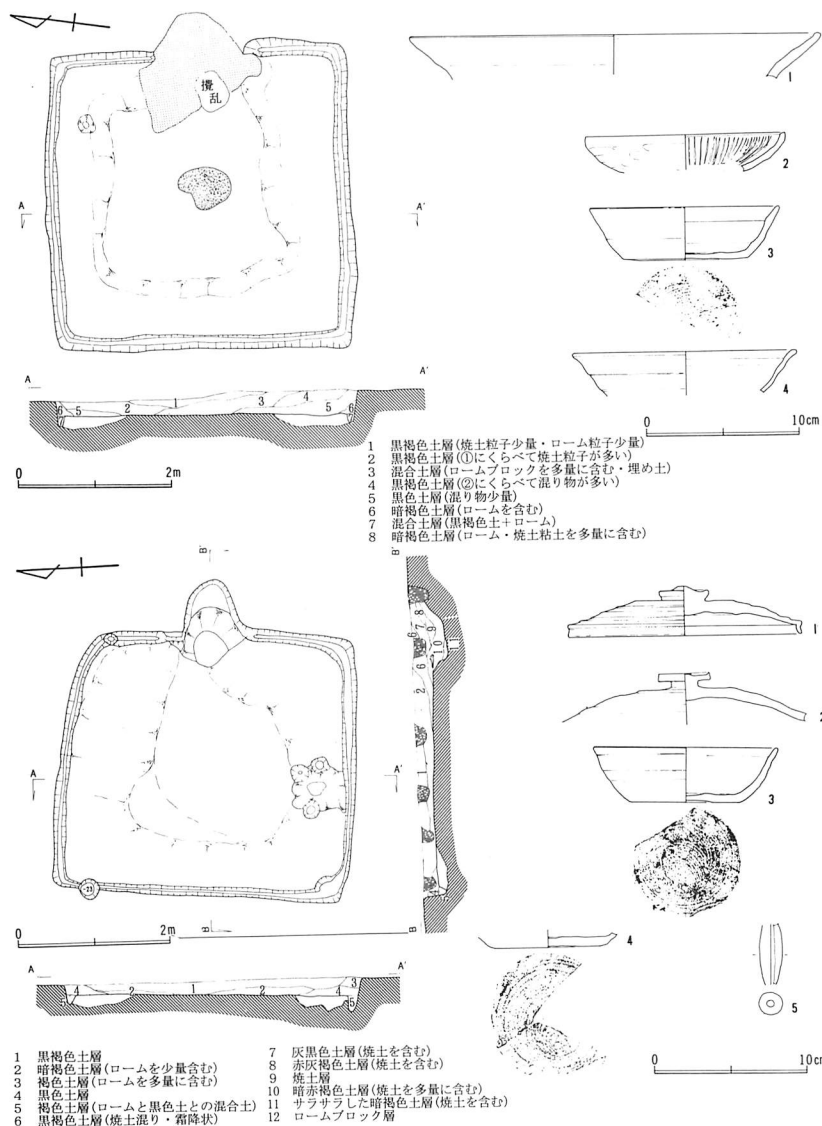
東西3m50。北側は調査区外である。壁高は5～10cmで、その上ゴボウ耕作による攪乱も受けているため、保存状態はあまり良くない。東側壁に少量の粘土があつたのでカマド跡と推定した(文献38)。

カマドと推定された箇所からコの字状口縁の土師器甕の破片(1)、小形台付甕の口縁部破片(2)、同脚部破片(3)、須恵器蓋(4)、須恵器坏の



第8-2図 松山遺跡第1次・2次・12次・14次遺構配置図〈1/500〉

Ⅱ 考 古



第8-3図 松山遺跡第1次1号・2号住居跡・出土遺物〈1/100・1/5〉